

花はさかりに月はくもりをさそを見るものは
雨にむかひて月を、またれもて春のゆく
知らぬもなほあはれになせけ涼

咲きぬべきほどの梢教りしをれたる庭など
こそ見とら多けれ 歌のよばがきにも

「花見にまかれりけるにはやく教り過ぎにけれ
はれば」とも「さほることありてまかすて」など

書けるは「花を見て」といへるに劣れることかは
花の教り月の傾きをたふさむひはさること

なれと、またかたくななる人ぞ、「よ枝かのみだ
教りにけり 今は見とらなり」などいふめる

とらづのころはけりめ終なきをかりけれ男女の
情しひとに逢ひ見ると所いふものはあはて

止みにしうさを思ひあたなるちきりさかいら
長き夜をひかりあかり 遠き雲井を思ひ

やり浅茅が宿に昔きよのふと色ふむは
いはめ望月のくまなきを千里のおさかなかめ

たこりも曉近くなりて待ら出たるがごと
い涼う青みたるやうにぞ涼き山の杉の梢に記

たる木の百の影うちくられたるむら雲かくれの
ほどまたなくあはれなり 権宗らかりなると

濡れたるやうなる葉の上にもくめきたることを

教りにけり今は見とらなかりしなまふめ
とらづのこころけりめ終なきをかりけれ男女
情しいと人に逢ひ見ると所いふものはあはて
止みにしうさを思ひあたらちきりをか
長き夜をひかりあかり遠き雲井を思ひ
やり浅茅が宿に昔きりのこころをふむは
いはめ望月のくよなきを千果の外さながめ
たこりも曉近くなりて待ら出てたが
い涼う青みたるやうにそ涼き山の杉の梢に
たる木の百の影うらうらいたるむら雲か
ほとまたなきあはれなり榎奈らかりな
濡れたるやうなる葉の上にもくめきたる
身にみこころあはれ友しかた都
免ゆれ
まへ月花をはさみ目にて見るものは
春は家を立ちさるる月夜の夜はねの中
ながも思入るるそなたのこころをかり
よき人はひらにすけるさまにも見え
さしもなほせりなり片田舎の人こころ